羅針盤
RASINBAN
COMPASS
09号
発行所：東京都豊島区南池袋
一丁目十三番十六号
日蓮正宗法道院法華講
03（3984）2650
http: // www.hodoin.net

真如苑とは、どのような宗教か

霊能と憑依（ひょうい）

人は身体が極限状態に長く置かれたとき、意識がもうろうとしてトランス状態になったり、ある種の妄想や潜在意識が顕現することがあります。これは、何も不思議なことではなく、割合とよく知られた事柄に属します。

また、稲荷信仰や犬神信仰などの畜生を信仰の対象とした人々が、その獣と感応道交し、憑依（ひょうい）したかのような異常な言動や行動を起こす、いわゆるつきものと呼ばれる現象も精神病理学では、そう珍しいことではありません。

もっとも、このような現象は私たちの日常生活の中でしばしば見られるといったものではなく、宗教的な荒行のような特殊な環境の中に置かれた場合に多く見られることは、文献的にも広く知られているところです。

いわゆる霊能力や通力といったものも多くはこの種の現象を利用したもので、霊友会や立正佼成会、大本教、天理教などの教祖がその現象を利用し、新興宗教の開祖に収まった事実は見逃してはなりません。また、それらの特殊な現象は、人の耳目を驚かせることはあっても、人を幸福に導くこととは何の関係もありません。そのため、前述した新興宗教も規模が拡大するに従って、それらの霊媒的な要素を隠し、奉仕活動などの道徳的要素を前面に押し出す傾向にあります。

ところが、今回取り上げる真如苑は、信仰活動の中心に霊能力者の養成をうたい、霊媒によるカウンセリングを前面に押し出した真言密教系の新興宗教です。

では、彼らは何に憑依して、信徒を導いているのでしょう。これが、まったく不思議なことに、教祖の病死した二人の息子に憑依して信徒を導いているというのです。何の説得力もない稚拙な教義ですが、その詐術のカラクリとその教団の生い立ちを見ていくことにしましょう。

真如苑の歴史と教義の核心

立川飛行機のエンジニアだった伊藤真乗は、代々伝えられている甲陽流の病筮鈔（びょうせんしょう）〈易学〉によって、病気平癒の祈祷を行っていましたが、昭和十年に、宗教結社「立照閣」を結成し、同年、大日大聖不動明王を勧請（新たに神仏を祀ること）します。これで、真如苑の前身となる新興宗教が誕生することになります。翌、昭和十一年には、正月早々より五十人の信者とともに三十日間の寒行を行います。この寒行の最終日に、伊藤の妻・友司が霊媒に目覚めます。友司は元々霊媒の家系だったようで、その時、たまたま居合わせた叔母の玉恵より三代目の霊能を相承したといわれています。この年の二月、伊藤も会社を退職し、いわゆる宗教家（教祖）として立つことになります。

それからの伊藤夫妻は寒行に明け暮れますが、そのような中、長男智文が風邪気味となり、同年、六月九日、病気平癒のために焚かれた護摩の煙の中で亡くなります。病気平癒を売り物にして新興宗教を作った矢先にもかかわらず、彼らの祈祷は自分の子供の病気に何の効き目もなく、祈祷中に最愛の息子は風邪で死亡してしまったのです。

冷静な判断力があれば、自分たちの作った新興宗教の祈祷に病気を平癒する力もなく、単なる思いこみで新興宗教を作ったことを後悔したに違いありません。ところが伊藤夫妻が選択したのは、この現実から目をそらし息子の死を信仰に利用することでした。

「愛児に重い荷物を背負わせて行く、若い母としての心境は稍（やや）もすると乱れ勝ちでありました。」（伊藤友司『草取り信仰』）

ここで友司が語っている「重い荷物を背負わせて行く」というのは、この風邪で死んだ三歳の息子が悩み苦しむ人々の身代わりとなって死んでいったというのです。これを「抜苦代受」と名付け、教義の根幹に利用してしまいます。真如苑では、これ以後、信者の悩みや苦しみを教祖の亡くなった子供が変わって受けるという詐術を前面に押し出すようになります。さらに伊藤夫妻は十五歳で亡くなる次男の死も同じように利用するのです。おぞましい妄想に取り憑（つ）かれたとしかいいようがありません。

世の中には、不幸にして幼き子を病や事故で亡くす親は数多くいます。その悲しみはいかばかりでしょう。しかし、亡くなったわが子が、世の中の人々の悩みや苦しみをその人々に代って背負って亡くなったなどという妄想にとらわれる親はいません。まことに手前勝手で都合の良い教義を作ったものだとあきれ返ってしまいます。

さらに、自分の幸・不幸が霊によって左右されると思ったり、未来の進み方を霊言に頼るなどは自己否定であり、人間の尊厳性を欠くものです。自分に関わる三世の因果はあくまでも自分自身の応報であり、霊とはなんら関係がありません。このような霊思想は、因果律を壊すから邪義というのです。この邪義を仏法では邪見といいます。もし、霊威、霊力があるように見えたら、それは魔の所為、利根・通力の部類です。

日蓮大聖人は『唱法華題目抄』に「魔にたぼらかされて通を現ずるか。但し法門をもて邪正をただすべし。利根と通力にはよるべからず」とこのような霊威、霊力を厳しく破折されています。

伊藤夫妻が作った新興宗教は、立照閣、真言宗・立川不動尊教会、まこと教団と名前を変えながら、昭和二十八年に現在の真如苑と名乗るようになりま

す。もっとも、亡くなった二人の息子に憑依して霊言を伝えるといった教義は、なんら変わっていません。現在は伊藤真乗、友司とも死亡し、三女の真聡（しんそう）が苑主となり、四女の真玲（しんれい）が補佐役を務め、教団を統括しています。

人心を惑わす本尊の乱立

多くの新興宗教に共通する邪義として本尊の乱立があります。これは、教祖自身が何を拝んだらよいかわからず、「下手な鉄砲も数打ちゃ当たる」式に取り入れていき、その結果、教義とは何の関係もない本尊を祀るようになってしまうのです。真如苑もその例に漏れません。その乱立ぶりを見てみましょう。

教主伊藤真乗は、教団創立以前、大日大聖不動明王を祀っていました。その後、真言宗醍醐寺派と関わるようになると不動信仰はいよいよ強くなっていきます。ところがこれだけではおさまらず、教団本部では、弁財天、竺法稲荷、地蔵、十一面観世音菩薩、久遠常住釈迦牟尼如来、そして、自作の釈迦涅槃像などが祀られ、一般信者宅では釈迦涅槃像のコピーを本尊として拝むように指示されています。どうやら、真如苑では本尊の本来の意義がわかっていないようです。本尊とは、

一、根本尊崇（こんぽんそんすう）……信仰の根本として尊び崇（あが）めるもの

二、本有尊形（ほんぬそんぎょう）……あるがままに尊い相（すがた）を表しているもの

三、本来尊重（ほんらいそんじゅう）……もともと尊び重んずべきもの

とのことで、これを本尊の三義といいます。この三つを真如苑で拝むところの対象物全部に当てはめたらどうなるのでしょうか。結局、何が尊いのやらわからない、つまり、これを本尊の乱立の邪義邪道というのです。わかりやすくいえば、本尊と教えと修行とがバラバラの宗教ということです。日蓮大聖人は「本尊とは勝れたるを用うべし」とこのような本尊の雑乱を厳しく破折されています。

さて、この教団の依経は大般涅槃経（だいはつねはんぎょう）です。釈尊入涅槃に臨んで説かれた一日一夜のこの経文を、一切経の中の正中の正、本懐中の本懐と思っているようです。しかし、これは間違いです。

法華経が釈尊の出世の本懐の経であることは、昔から世間でも衆知の事実です。天台大師の五時教判では、華厳・阿含・方等・般若・法華涅槃と、第五に法華と涅槃を同時にくくられています。法華経をもって脱益の仕上げとされた釈尊は、未来の流通をおもんばかって涅槃の前日一日一夜の法を説かれました。これを涅槃経というのです。いわば、法華経の利益を稲穂の収穫とするならば、涅槃経の利益は法華経で取りこぼした落穂といえます。ですから、日蓮大聖人の御書にも法華経の補足としてたくさんの涅槃経が引用されています。特に守護国家論等は多いようです。

その守護国家論の一節に、次のような箇所があることを忘れてはなりません。

「問うて云(い)わく、法華経と涅槃経と何(いず)れが勝れたるや。答えて云わく、法華経勝るるなり。」

以上のように、日蓮大聖人は法華経と涅槃経との勝劣をはっきりと示されています。また、真言宗醍醐寺派と自負しながら、大日経を捨てて涅槃経を依経として矛盾を感じないのでしょうか。さらに、大日如来ではなく釈迦の涅槃像を刻み、それに向かって「南無真如一如大般涅槃経」などと自ら讃題（唱題）し、人にもさせる錯綜ぶりは仏教の順序次第も知らぬ新興宗教の面目躍如といったところでしょうか。

末法の仏様とは

仏教では末法という言葉がよく使われますが、末法とは、どういう時代を指す言葉なのでしょう。末法とは釈尊が亡くなられて後、二千年後の時代を意味する言葉なのです。末法の末とは、漢文では否定形として用いられ、末法とは、釈尊の法（白法）がなくなった時代、釈尊の法が効力を失った時代のことを指します。釈尊が入滅して後、二千年後、釈尊が説かれた教えに人々を救う力がなくなり、経巻のみがあるだけで、正しい修行も功徳もなくなり、自然災害が多発し、不治の病が流行し、人々の間では争いの絶えない時代が訪れると経巻には説かれています。

では、末法に入り、釈尊の法が滅した後、どのような仏様が現れるのでしょう。また、それは、一体、どの教典に説かれているのでしょう。実は、そのことが釈尊の出世の本懐である法華経に説かれているのです。

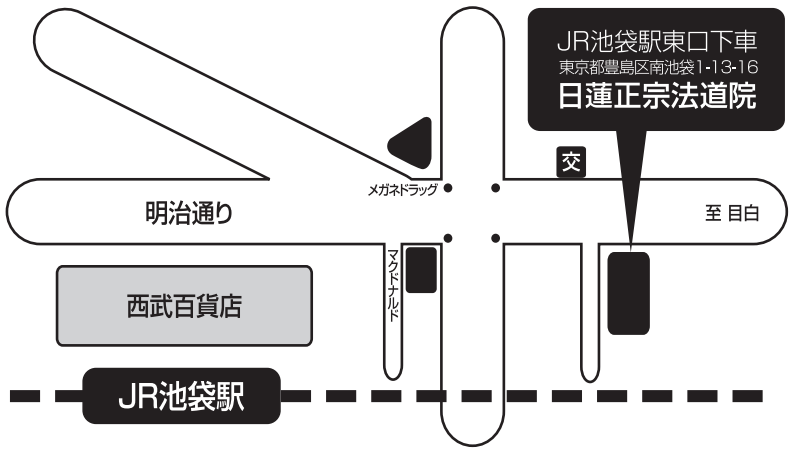
釈尊は五十年間にわたり法を説いてきましたが、最後の八年間に自分自身がこの世に出現した一番の目的である最も重要な法を説かれました。その法こそが法華経だったのです。

さて、法華経に説かれた末法の仏様についてですが、法華経には、どのように説かれているのでしょう。

法華経には、その仏様は、末法に現れて法を説くが、ある時は、しばしば所を追われ、また、ある時は、時の権力者や出家在家の人々に迫害を受け、石を投げられ、杖で打たれ、あまつさえ、刀の難まで受けられながら、一切衆生を成仏に導き、幸せにする法を説いていくと説かれています。その仏様は、末法の衆生の闇を払い、人々が持っている尊い命を輝かせる大白法を所持され、その法を説くために、いかなる難も忍ばれるのです。

日蓮大聖人は、末法の一切衆生を救うために、法華経に予証された通り、数多くの法難に遭いながら、唯一無二の法を説かれました。そのお振る舞いは、まさに、法華経に説かれたそのままを身をもって行じられ、まさに、末法の仏様であることをその行動によって証明されたのです。

このことからもわかるように、末法に生きる現代の私たちが信じるに足る正しい教えは、ただひとつしかなく、その教えを説かれた方は、末法の仏様である日蓮大聖人なのです。

日蓮大聖人は、末法の一切衆生を真実の幸せに導くため、最高尊極の法である南無妙法蓮華経を唱え出されました。その日蓮大聖人の教えを七百五十年間にわたって現在まで清浄に誤りなく受け継いできた唯一の教団が富士大石寺を総本山とする日蓮正宗なのです。

私たちは日蓮正宗の信徒として、法道院（池袋）で歓喜に満ちて信仰に励んでいます。どうか、みなさんも真実の仏法と出会って、かけがえのない人生を光り輝かせてみてはいかがでしょうか。